

建築家の檻



連載 6

Grasshouse

「満州に渡ったのは、昭和七年だったかな。わしが十八のときだ。前の年にお袋が死んだし、世の中不景気でどうにもならん。わしは小学校を出て米屋の小僧をやっていたが、福島で田舎で燻っててもしょうがないってんで、満州で一旗挙げてやろうと目論んだんだ。もともとわしは、大陸で馬賊の親分になろうって夢を持っていた。日本にいたって、コセコセしたつまらん奴が理屈こねて、でかい面をしているだけで、お話にならんと思ってな。満州には各県からいろんな開拓団が行っていて、こっちで噂を聞くかぎりでは、威勢のいい話ばかりが伝わってくるわけさ」

丹下会長は、片手で『丹下精神注入棒』を床に突き立てながら、身を乗り出した。

昔の軍隊にもこんなものがあつたらしい。腕のない方の肩が斜めに上がり、袖の先がポケットに、折り紙のように織り込まれている。

この日の聞き役も僕と秘書の芳田慶子だけだった。

会長室の奥の壁には、残忍な眼をした巨大な虎の剥製が、咆哮している瞬間のように黄色い両牙を剥き出しにし、書棚の上では、大鷲が褐色の翼を広げている。

喜作会長は、どうやら猛獣、特に「××の王者」といわれるような肉食獣が好きなようだ。

「わしはな、自分の王国を作ってやろうと思ったんだ。それこそ美人を仰山侍らせて、毎晩豪勢に酒池肉林、てわけさ。……だがなァ、渡満してすぐの身寄りもない若造などに、何もできやせんよ。だだっ広い風景の中で、背中に風呂敷つつみを背負って、みすばらしい恰好をして、とぼとぼとうなだれて歩くだけの惨めな何週間かが過ぎた。ある日、車にはねられそうになって、わしは道端に転がった。血相を変えてドアを開けて飛び出してきた若い衆に怒鳴られた。『どこに目ん玉つけてんだ、この野郎』ってな。そして背中をこっぴどく、蹴っ飛ばされた。わしは店の前に出ていた椅子に、頭をしたたかぶつけていた。朝から何も食っていないので、腹もすいていたし、声も出なかった。もういいや、これで殴られて死ぬのなら、そうになってしまうのも天命だろうと思って、前のめりになったまま蹲って頭を抱えて目を閉じておった」

僕はしきりにメモ書きをしていた。もちろん、録音の方は万全だ。

「おい、芳田。ビール出せや」

目をこすりながら会長がいうと、心得顔で秘書は立ち上がり、カウンターの脇の冷蔵庫から瓶ビールを出してきた。

「お前らも、飲め。……慶子もな」

まだ、真昼間なのだ。しかし、この小独裁者に逆らったら、何を言い出すかわからない。秘書は僕に意味ありげに目配せして、コップをさらに二つ並べた。

「ああ、それで……。どこまで言ったかな」

「会長が、蹴っ飛ばされたところ、で一す」

秘書はすまし顔で、そっけなく答えた。「ざま見ろ」とでもいうような顔つきなので、僕はビールの最初の一口を、ふき出しそうになった。

「うむ。そじゃった、そじゃった。……しばらくすると、紅色のチャイナ服で体をつつんだ綺麗な姐さんが、車から出てきた。高価なもので、金の刺繍が入っておったな。あんな美人は見たことがなかったのオ。潤んだぱっちりとした大きな目を見開いて、『まあ、血が出ているわ』といって、片膝を曲げて、わしの体を起こすようにしてくれた。そのとき、ドレスの腰の割れ目のところから、白い太ももが覗いて、若かったわしは、ドキリとしたもんだよ。しかも、見たこともないような光沢のある絹のハンケチで、惜しげもなく、わしの血の滲んだ額の傷をぬぐってくれた。いや、それ以上に、顔をふっと、息がかかるほど近づけられたときの香水の匂いは、天上の花々の芳しい香りとももいうのか、甘露の微香というのか。人並みに扱われることに飢えていたわしは、陶然とするやら、畏れ多いやら。あとで聞くと、満映の映画にも出ていた女優さんで、廣澤さんの愛人の一人だった。何でも、リー・チェイリンとか言って、日本人と中国人の混血だそうだ。日本名は、そう、久美麗子だったかな。満映の何とかいう国策映画では、李香蘭の妹役をやったことがある。

……わしがその美人に手当されていると、車の後部座席から、のっそりと、羽織をはおってステッキをついた恰幅のいい、壮士風の大男が出てきた。真っ黒い立派なカイゼル髭を生やしておった。これが廣澤大悟郎だ。大陸浪人の中では、ちょっと知られた人物だな。廣澤さんは『なんだ、まだ子供じゃないか。怪我をさせたのか』と、鋭くいった。次の瞬間、物凄い勢いで振り向いて、馬鹿もん！ と、運転手のチンピラの片腕を取って、すっと上にあげたかと思うと、逆手をとって、路上にひっくり返した。たちまち、人間の体が、風車のように、くるりと回転してしまったんだ。

埃っぽい真昼の路上からは、おおーッという日本人の声や、アイやあーという中国人の声が、一斉に起った。すでに見物人が、わしらの周りを取り囲んでいたんだな。……廣澤先生は怒鳴りながら、ステッキでそいつの背中を、二三次こっぴどく打ちつけた。あとで聞くと、柔道の有段者だというんだ。しまいには運転手は、わしの前で土下座させられた。どこの馬の骨かわからぬ、わしみみたいな小僧っ子に、そこまでせんでも、とは思ったがね。まあ、廣澤さんも、そういう芝居が大好きな男でな。翌日、町中の料亭や置屋で自分の噂がたっているのを、満足そうにほくそえんでいるのさ。……とはいっても、わしの運命は、そこから変わったんだ。この人の子分というか、食客になったわけさ。この廣澤という親分に言われるままに、初めは大連の港湾で、苦力の真似事みたいな荷担ぎから始めたさ。しかしこの頃が、一番辛かったわな」

喜作会長は、そこでしみじみと遠い目をして黙り込んだ。

「食うものも口クになくて、体はボロボロ。その年の冬は病気になって、倉庫の端でこのまま死ぬかと思ったな。ふだんは廣澤さんとはめったに会えないから、兄貴たちに、よくいじめられおってな。しかし、たまに先生が来ると、あのかの坊主はどうしたと呼びつけられて、おい喜作、肩をもんでくれ、こら喜作、靴を磨いてくれなどと、何かと用事を言いつけられたのさ。というわけで、何かと勘の良いわしは、廣澤先生に、次第に可愛がられるようになっていったという寸法さ。

そんな流れでな、先生が土木工事の仕事を拡大したとき、現場監督にされたわけだな。ようやく人の上に立てるようになった。ダムの土砂運び、兵舎の建設、新京や奉天の道路工事といった仕事だ。それでも、後になって、廣澤さんの酒の相手をしている時に、そういえばあの時、車に乗っていた綺麗な姐さんはどうしましたかと聞くと、隣にいた兄貴分から、『おい。それ以上は、聞くな』と凄まれた。つまり、あの女優のリー・チェイリン、久美麗子のことだ。

廣澤さんは何食わぬ顔で、そっぽを向いている。あの一瞬は、ちょっと恐ろしかったな。可哀想に。わしの血だらけの顔を絹のハンケチで拭ってくれたチェイリンさんは、むしろ大和撫子といってもいいような、美しい優しい人だったが……。あとで聞くと、年下の若い役者とできて駆け落ちしようとしたころ、氷が張った川を渡る手前で、廣澤さんの手下にとっ捕まり、二人ともその場で軍刀で斬殺されたらしい。投げ込まれた死体は、川の氷の下に深く潜り込み、春まで出てこないわけさ」

僕は次第に怖くなってきた。

「仕事はきつい重労働だったが、こうして、現地の連中を、どやしつけて顎で使うようになり、わしはさらに人脈を広げて行った。たとえば、廣澤さんの知り合いで、やはり大陸浪人の鏑木白元さんという、坊さんみたいなてかてか頭の、軍属関係の仕事の手配をやっている人だ。それに、満鉄の連中や関東軍の軍人だな。

白元さんというのは、皆に白元老師といわれて、小柄だが、禿頭に長い顎鬚をはやした茫洋とした仙人みたいな爺さんだった。もともとは吉野の山伏とかで、大陸に渡って来てからは、中国仙道を極めた人らしい。やっていることは、満州の表裏のいろんな人脈をつないでいるブローカー、フィクサーみたいな人じゃった。

宴会の席の十八番は、太極拳の舞いのような奇妙なポーズをとって、エイッと気合をかけて、お猪口をひっくり返してみせるんだ。お猪口がな、いきなりパシッと横に跳ねるんだな。それから、京都から来た芸者が、急に顔を赤らめ、下の方を押さえてもじもじしながら、『先生、いま、何されはったのん？ 急に、あつたかアなもんが、変なところに、ヒヨコみたいに潜ってきて』と困った顔をするのさ。老師がおもむろに、鵜飼が網を引くように、両手をゆっくりと手繰り、ヒュイッと引くと、芸者はヒューッと叫んで、のけぞって、後ろにひっくり返ってしまったんだ。もう、酒席では、将校達も、芸者衆も、やんややんやの喝采だったわ。

何でも白元老師は、気の玉を、自由自在に飛ばせるんだそうさ。軍人たちが感心していたのは、戦地で使える護身術で、気を練っていると、体のまわりに一種の厚い繭みたいなものができて、弾除けになるそうさ。向こうから弾が飛んできて、勝手に弾かれて除けてしまうというのさ。わしはどうも、あれだけは眉唾だといまだに思っとるんだがね。白元さんは、売春宿も経営していて、中国女の千人切りの噂もある、そっちの方の達人だという。とにかく、何だか得体の知れない魔法を知っている不思議な爺さんだったな。関東軍のお偉方には、護身法のほか、よく中国仙道の練丹術や、養生術を伝授していたようだ」

次々と出てくる大陸浪人たちの異様な雰囲気、僕は啞然とした。少しばかり、食傷気味にもなっていた。

「その日、廣澤先生の立会のもと、白元老師にこういわれた。……これはまだ、内密の話で、お

前の度胸を見込んで言うのだが、軍の物資を運ぶ仕事をやってみないかというんだな。匪賊の隠れ潜んでいる危険地帯を、あまりおおっぴらには言えんような物資を、密かに運搬するのさ。...
...おい、若いの。その物資とは、何だと思うかね？」

痩せた老人は片腕を鋭く曲げて、水を一口飲んだ。

喉に鶏のような黄色い肉が垂れ、貧しく上下している。

僕は「金塊か何かですか」と言った。

「阿片だよ。物凄い金になるんだ。なに、いまだって戦争はケシ畑が関係している。中東とかなア。.....実はその廣澤さんが連れてってくれた奉天の茶館も、手前の方は料亭で宴会席があるわけだが、奥の扉を開けて、赤いぼんぼりが吊るされた廊下を渡り、階段を地下へと降りてゆくと、妖しい煙のたちこめる阿片窟になっていたんだ。あとで見せられたが、御簾の向こうで、女どもが金のありそうな男とベッドでキセルを吸いながら、優雅に乳くりあっておった。阿片というのは、清朝の高官たちにも愛されたぐらいの、実にトロリーとした、まるで桃源郷をさまようような、上品な酔いなんだ。しかも阿片は、当時の関東軍特務機関の資金源でもあったわけだ。里見さんの名前がひそひそ声でよく語られた。つまり、廣澤先生や白元老師の一味は、いわゆる里見機関の末端だったわけだ。

.....おい若いの、知っとるか、里見甫の里見機関」

「いいえ」僕は正直に答えた。

「勉強せい、もっと歴史の勉強を！」

きつい目で会長に睨まれた。でも老人は、笑っているようにも見えた。

「あの戦争だってなあ、本当はもっと、とてつもない、でかい計画があったんだ。連中は、世界史をがらりと変えようとしておった。それが誰かはここでは言わないがな。表に出ている歴史は、ほんのカモフラージュに過ぎん。誰が敵で、誰が味方か。いろんな点を結んでいくと、するするとつながってきて、啞然とするような、ありえないような絵の構図が見えてくる。設計図は思いもかけない連中が描いておる。さすがにわしも、それ以上は言えんがな。これでも、命が惜しいからな」

「.....そう、なんですか」

「なんのかのいっても、いまだに戦後の日本ぜんたいが、目には見えない透明な檻の中に入れられているのさ」

老人は注入棒を立てて、意味ありげに目を細めた。

「目に見えない、透明な、檻.....」

僕は思わず、繰り返した。

しかし会長は、それには答えず、話を進めた。

「それ以後、わしはその仕事で、上海の方にも何度も飛んで行ったな。アヘンルートさ。なあに、その実、満鉄や関東軍のお偉方の私服肥やし、裏金作りさ。わしは連中に、恩を売っといたわけだ。新京はこれから都を作るってんで、土木工事の仕事はどんどん入ってきて、わしは廣澤先生の手下であった大辻親分とも盃を交わして、独立した組を作らせてもらったよ。つまり土建業と密輸、表裏二足の草鞋さ。おまけに満州政府要人の私服を肥やしてやればやるほど、満鉄の建

設部の鮎川観介とコネができて、土木工事の仕事も入ってきた。ハハハ。インテリの鮎川さんは特に、それまでの土方の流儀ではなくて、わしに建設、建築というものを教えてくれたよ。

ハルピンのアールヌーボーやアールデコ建築という、ハイカラ建築を見せられてな。土方あがりのわしも、大学出の建築家たちがよく口にしてるル・コルビジェだの、ブルーノ・タウトだの、ガウディだの名も、何となく、知るようになった。

まだ二十歳ちょっとだが、わしは人に恵まれてな。渡満して四、五年もした頃は、もう、成功者といっている部類に入ったさ。満蒙開拓団の連中は、凍傷だらけでロシアに近い不毛な凍土を開墾していたのにな。その代わり、わしは何度も命を失うような経験をして、二度ほど死にかけたさ。モーゼル銃を片手に、ずいぶんあちこち飛び歩いた。まあこれも結局、馬賊の親分みたいなもんだ」

「銃を、使ったんですか」

「匪賊を撃つときはな、こうして」と会長は『精神注入棒』を構えてみせた。

「匪賊って、抗日ゲリラのことですよ。日本の植民地政策に反対した一般人も含めた」

「匪賊は、匪賊さ」老人は、黄色い顔をつるりと撫でた。

横を向くと、棒を垂直に立ててつまらなそうに、「仲間は何人も殺された。だからこっちも殺した。それだけのことだ」

僕は反論しようとしたが、秘書の芳田慶子がとがめるようなきつい眼つきをした。

「この片腕は、そのときやられた。終戦のとき、現地の民間人にリンチされたというのは、大嘘だよ。わしは、匪賊に腕を潰されたんだ。いわば左手は、お国のための犠牲さね」

老人は残っている右腕で、失われた腕の根元をゆっくりと撫でた。

「でも匪賊っていうのは……」

「おい聞け。偉い人にはずいぶん会ったぞ。白元老師や、鮎川さんが、あっちこっち連れ廻してくれたのさ。もうすっかり大陸の土に馴染んだ頃だったが、ある時『八千代』という高級料亭に上がったときだ。綺麗な芸者衆がいて、国務院のお役人や関東軍将校、中銀の幹部たちに酒を注いでおった。まあ他にも、薄汚い格好したゴロつきも、いっぱいいたがね。そのとき宴会の上座に座っていたのが、誰だと思う。

岸先生じゃよ。こう胸をそらしてナ、にこやかだがギョロリとして眼光鋭く、口元がきりりと引きしまって、その辺の木っ端役人どもとは違っておったな。顔が長くてな、まるで『三国志』の劉備玄德か諸葛孔明だ。酒を注がれながら、隣の軍人に何か耳打ちされると、何度も大きく頷いておった。ああ、これが商工省の切れ者の岸信介かと、見惚れたもんだよ。馬の骨のわしから見れば、雲の上の人さ。

後で鮎川さんから、『こいつあ、やんちゃ坊主でね。匪賊の潜んだ山道を、鼻歌まじりで平気で突っ込んでいくんです。結構、使えますよ』と紹介されて、頭を搔いたさ」

「会長は、岸さんと直接お話しされたわけですね」

秘書の芳田慶子は両手を膝に重ね、感心したように頷いている。

「おお、そうとも」老人の顔がパッと輝いた。「もともと岸さんの周りには、いつも大陸浪人や右翼ゴロがいっぱいいたがな。わしもその一人だ。ハハハ。……岸先生は後に『満州は私の作品

』と言ったそうだが、あの人の鋭い顔を思い浮かべると、確かにそうだったろうという気がする。岸さんが来てから満州は例の五か年計画とかで、どんどん変わっていったからな。そういえば、オイ、忘れていたぞ、その日、遅れて到着した人物がいたんだ。下で軍の車が停まるやいなや、もう玄関が騒々しくなっていた。綺麗どころや芸者衆が、急に何人か血相を変えてぞろぞろと降りていった。しばらくすると、サーベルを下げて背筋をぴっと伸ばし、頭をつるっ禿にしたちょび髭の軍人が、配下を従えて大股で入ってきた。周りの連中は、たちまち最敬礼だ。

その軍人は、上座の岸先生の隣にストーンと座ると、鷹揚に構え、隣の男に酌をされていた。こう片手を斜め前に延ばして膝に当て、背中をぴっと伸ばしてたな。一気に、座が引き締まったさ。それが東条さん、東条英機さ」

会長の話はとりとめがない。時間が前後するし、自分を大物に見せたいためか、著名人の名前を繰り返し出したがる。

回想に浸るかのように眼を閉じ、肱で『注入棒』を支えながら饒舌に語り続けた。

芳田慶子は、うまいタイミングでにこっと笑ったり、お茶目にからかうように茶化したり、眼を丸く見開いて驚かせてみせたりする。老いた会長は、この孫のような秘書のからかいの言葉には、決して怒ったりはしない。むしろ目を細めて喜んでいるのだ。

僕はふと、何の気なしに壁を見た。

この前は設置されていなかった小型の監視カメラが、柱の脇の目立たぬところから、こちらを睨んでいる。レンズに無機的な紫色の円い影が映り込んでいる。この椅子の下あたりには、新たな隠しマイクもあるに違いない。

喜作会長は一通り満州談義を終えて満足した後、退屈してきたのか、目を細めて、肩をぽんぽん叩いていた。

「おお、そうだ。あんた、庭の神社を見せてやろうか」

そうやって老人は、また顔をつるりと撫で、秘書に杖を持って来るように指図した。

会長と秘書と僕の三人は、エレベーターに乗った。

この老人といっしょにいる狭い箱の中は、なんとも気詰まりな時間だ。

あの凸凹した軍艦のような建物の内部にいるかと思うと、さらに落ち着かない。

しかも『父親殺しの建築家』鷲巣数光の設計なのだ。僕はいま、その男の想像力で創られた空間の中にいるわけだ。建物の壁や天井から、あの写真の憂鬱な髭の男の息遣いが感じられるような気がした。

七階のエレベーターの扉が開くと、幾分よろよろとしている会長は、秘書に脇を支えられながら、廊下を進み、外に出た。

ドアを開けると、両眼に緑が広がった。こんなところに庭園があるのだ。

乳白色の空を背景として、木立や植込みが緑色のくっきりとした輪郭を作っている。檜、櫟、椎、楓などの雑木林が風に煽られ、左右にざわざわと揺れている。

ビルの屋上とは思えず、いきなり、東京郊外の林の中に迷い込んだようだ。ここは戦艦のような建物のあちこちに凸凹と突き出している空間のひとつだろう。

鴉が数羽、木の枝を揺らしながら、黒紫色の嘴をすりつけている。

鴉を見ると、会長は必ず、憎々しげにステッキで木の幹を叩いた。黒い鳥が嘲るように舞い上がる。遠くへは逃げず、隣の枝に移るとガラスのような眼玉をして、何度も首を傾げる。

「くそっ、くたばりぞこないめ」

老人は息を荒くし、さらに小径を進む。足腰が弱いはずの喜作老人は、秘書の手を払い、ステッキを脇に挟みながら灌木の中を進むと、振り向いて皺だらけの顔でニカッと笑った。

「ここから先はな、わしの福島の実家の裏山の風景を、そのまま再現しとるんじゃ」

石段を登ってゆく老人の片腕の袖が、ひらひらと風に翻る。

さっきよりも、血色良く見える。精力旺盛な年寄りだ。秘書は、黙り込んでいた。

木立の間の小径を分け入ると、藪に囲まれた小さな淫靡な沼があった。

死んだ魚の眼玉のようにどんよりと濁り、緑色の藻に蔽われた木舟が沈みかけている。朽木が沼に浸かり、ザリガニでも釣れそうだ。

「わざわざ福島まで鷺巣という建築家を飛ばせて、写真を撮らせた。そして、忠実に造園させたのさ。プロデューサーは鷺巣の野郎だ。あいつも困った奴でう。自分のオヤジを殺しやがった」

「会長。鷺巣さんのお話は……」

芳田嬢は、子供に「しいーッ」というように、口もとに人差し指を当てた。

お気に入りの秘書にとがめられるのが好きな老人は、ニヤリと笑った。

会長はくるりと振り向くと、なおも奥へと入っていった。

この小独裁者御用達の建築家の役割も、かなりしんどい仕事だったのではあるまいか。ちょうど自分史を記述しなければならないゴーストライターのよう。

(なるほど鷺巣数光氏は、ゴーストアーキテクトか)

僕は少し憂鬱な気分もまじえて暗く笑った。

途中、朽葉の中に杖をごそごとと突っ込み「いないな。どこ行ったんだ元帥は」と会長は呟いた。

「そろそろ冬眠かね。平八郎さんは、いつもこの辺にいらっしゃるはずなんだがね」

秘書が僕に「青大将のことよ。凄く大きくて、気味悪いの」と耳うちした。

「福島にいた蛇の平八郎か……。何代目だろう」

もし以前聞いた初代の平八郎だったら、化け物だ。きっと歌舞伎役者のように、延々と代を重ね、ここでは半ば神様扱いされて、大事に飼われているのだろう。こんな習慣も、その白元老師のアドバイスだろうか。

色褪せた鳥居が見え、ばたばたと旗が翻り、その奥には神社の社のようなものがあった。社は、暗く光る鋼鉄で組み上げられているように見えた。

縦と横に組まれた鉄材とが、異様な重い力を帯びて鈍く輝いている。屋根は錆びた日本刀のように突き出していた。

――鉄の神社だ。

神社の背景には、大きな暗い柩のような木箱が置いてあった。そこには錆びついた古い大工道具や、ぼろぼろのツルハシや、壊れた梯子、わけのわからない大きな赤錆びた鎖が、架けられ

てあった。ちょうど山奥の廃寺の首や光背の破壊された仏像群のように、どこか荒れた印象だった。

曇天を刺している幾本かの旗は、不吉な狼煙のような雰囲気、しきりに揺れている。その旗には何か毛筆で、黒々と書き込まれてあった。

「丹下神社だ。この下の石に、御神体が埋まっている。社運を盛り上げる岩だよ。建築家に選ばせてな。何度もわしを救ってくれたありがたい一い岩じゃ。わざわざ飛騨の山奥から持ってきた由緒正しい磐蔵の一部なんだがね。何でも、強烈な氣を発しているそうだ。そういうことは、むかし、白元老師に、ずいぶんと教わったもんさ」

老人は、片腕を伸ばしステッキで神社を示して、僕と秘書の顔を見較べながら言った。

「新入社員には、まっさきに、ご神体に挨拶させる。わしはそういう方針だ」

そして社に向かって厳しい面持ちをすると、ステッキを秘書に渡し、一步前に進み出た。鬼のような黄色い顔が、たちまち哀願するような表情に変わり、上を向いて眼を閉じた。

ぱんぱんぱんと、大きく柏手を打つと、頭を垂れた。

「さあ、あんたもやらんかね」

僕は断るわけにもいかず、困惑した顔で目をぱちぱちさせていた。幸い、秘書の芳田嬢が一步前に進んで、先にお手本を示してくれたので、僕もぎこちなく、それに習った。

「なんだ、いまの若い者は。神社にも行ったことないのか」

多分、柏手の打ち方が間違っていたのだろう。そう苛立たしげに老人は言うと、握った腕を伸ばし、ステッキで僕の首根っこをつついた。もう一度、頭を下げろということらしい。さらに、背筋を伸ばせというつもりか、背中を縦になぞる。

これではまるで、朽葉の中の青大将を、杖でつつくようなものだ。それにしても、どうしてこんなに他人に対して高飛車に出られるのだろう――。

「年に一回、丹下祭という祭りをやる。この屋上から出発してご近所を練り歩くのさ。写真とビデオがあるから、後で見っておけ。アー、それと今度、いつかわしの建築作品を、車でざっと廻るといいな。建築作品見学ツアーだ。運転は、高橋にやらせればいい」

また難題が増えそうだ。そう思いながら僕は、神社の裏に何か奇妙なものが立っているのに気がついた。

それは、二メートルぐらいはありそうな布製の人形だった。雨で濡れてポロポロになって傾いていたが、それは確かに人の形をしていた。まるで化け物のようなカカシだ、と僕は思った。

頭にはニンジン色の太い毛糸が絡まり、ボタンを縫い付けた青い二つの眼玉、そして靴下に何かを詰め込んだらしい大きく下がった赤鼻。グロテスクな道化師人形で、何やらハロウィーンじみていた。

棘のついた鉄条網が、蔓のようにあちこちから突き出している。この空中庭園には鴉が多くやってくるので、その予防のためだろう。不快なのは、このぼろぼろになった布製のピエロが、肩に監視カメラを背負い、こちらをじっと注視していることであつた。

会長室に戻るともうそろそろ来客があるというので、僕はを追い出された。エレベーターが閉まり、ようやくほっとした。

しかしすぐに扉が開いて、秘書の芳田さんが入ってきた。

「ごくろうさま」彼女は笑った。

「お世話になります」と多少なじみになった僕は、儀礼的に頭を下げた。「大変ですね、秘書なんて毎日」

「大変なんてものじゃないですよ。ストレスでしょっちゅう体がおかしくなっちゃう。とにかく、あの会長でしょう。どう思います」

「いや、何ともユニークというか」

「ねえ、羽木さん。昼食、下に行きませんか。ウチの会社、社員食堂だけは、まあ自慢できるんです。他は無茶苦茶ですけど」

「食堂があるんだ。でもいいんですか、秘書がそんなこと言って」

「だって、本当なんだもの」彼女はにこっと笑った。「ねえこの制服、ダサイと思ってるでしょう。蝶田梨絵のデザインで、感覚がもう古いわよね。どういうわけか、官公庁関係ではよく制服に採用されるけど。今時こんなの、婦人警官だって着やしないわ」

「そんなことないですよ。まあ、もっとも芳田さんなら、もっと似合う今ふうのファッションは、幾らでもあるだろうな」

「ありがと」秘書嬢は、すまし顔で小首を傾げた。

「でも建設会社って、どこもこんな凄まじい社風なんですか」

「ここは特殊よ。こんな前近代的な企業、ないわ。建設業界のガラパゴス諸島っていわれているくらいなもの」

「ガラパゴス」

「孤立して進化の遅れた島よ」

「そう言えば」僕は言った。「イグアナに似ていなくもないですね、会長」

「あの喉のとことか、鋭い目つきとかね。どちらかというと、海イグアナの方かしら」

喜作老人の喉に下がった皺だらけの薄い皮を思い出した。

「でも、芳田さんて、秘書のわりには口が悪いなァ」

「そう？　だって、どうせあたし、最初から秘書を希望したんじゃないもの。会長の鶴の一声で、いきなり決められちゃったの。女性社員は、能力も適性も関係ないのよ、この会社。柔順で素直でありさえすればいいの。だからお望み通りのオシトヤカなキャラクターを、演じてあげているわけ。あたし、けっこう化けるの上手でしょう。どうせこの会社にいるのも、長いことないけどね。ええと、ハンバーグ定食。ね、ハンバーグ定食にきなさい」

エレベーターが停止し、地下一階の扉が開いた。

「はあ。お薦めなら」

地下の社員食堂にもまた、濃淡さまざま植物が厚みのある葉群を垂らして溢れていた。

空中庭園が日本の田舎の風景ならば、ここは地中海近辺の感覚だ。本社ビル内部は、さまざまな異質な次元の空間が隣接されているようだった。しかし、なんだかんだ言いながら、僕は鷲巢数光による建築の暗号解読を、それなりに愉しんでいるような気がする。無機的な銀色をした天

井に視線を走らせると、角の装飾や緩やかな曲線の一つひとつが造型的な意味を持って、迫ってきた。なるほど、あそこのガラスを通して取り入れられた光線は、床の上に淡く美しい虹色のステンドグラスのような抽象画を描いているのだった。

一体、自分自身の設計による空間を創り上げるというのは、どんな気持ちなのだろう。丹下喜作の背後に仄見える鷺巣数光の影と、彼が構築した作品を、僕は二重写し三重写しで、体験しているような気になっていた。このすべてが、鷺巣氏の想像力によって構築された空間なのだ。

広い空間は採光性のいい喫茶コーナーと、下の階の食堂との二つに分かれていた。

ギリシア建築風の白亜の石柱が幾本か、中二階のようになったフロアの上下を貫き通している。バルコニーのように張り出した部分から、おびただしい蔦の葉が、濃緑の重い幕布のように垂れ下がっていた。

社員はゆるやかな階段を通過して、上の喫茶室から下の食堂に降りていく。そろそろ混み始めていた。

軽い金属食器やコップの触れ合う音がせわしなく響いている。プレートを抱えながら社員が上の階の一行に並び、次々と下方へと降りてゆく。

あちらこちらで私語が囁かれ、その囁きが層を成し、白くて高い天井には厚みのある柔らかな響きが食器の音と混じり合い、仄かな銀の水泡のようにざわめいていた。

僕と芳田さんは、食券を差し出しメニューを受け取ると、階段を降りた。

フォークを動かしているたくさんの社員の黒いつむじが見える。

西側の側面は、よく磨き上げられたガラスが張られ、一階のアトリウムから大量の光が取り込まれていた。

楕円形に囲んでいるコンクリート壁を背景に、竹林が涼しげに擦れ合っていた。中央に植えられた二十本ほどの細い竹は、あたりの空気を淡い緑色に染め、先端部分は乾いた明るさを帯びている。根本は無数の柔らかな楔のような笹の葉で蔽われ、ぎざぎざの青い葉影を投影していた。周辺には枯山水のように平行線の流れる白砂が敷きつめられている。

かなり凝った設計だ。

しかし注意して見てみると、ここにも幾つもの監視カメラが設置され、いたるところから社員の動向を疑わしい目つきで探っていた。

食券を買って二人で席に着くと、芳田さんの背中を指でつつく者がいた。

「あら花枝。ここ座れば」

それは例の北歐美人のような受付嬢だった。彼女は驚いように目を大きく見開いて、芳田さんを覗きこんだ。友達同士らしい。

「いま、会長の本を作っている羽木さん。こちら榎野花枝」

「ええ。お顔は知ってます。受付のところで」僕は笑った。

「あ、そっか。そりゃそうだわ。……同期なの、あたしたち」

芳田慶子は、透明な赤茶色のチャウダーをスプーンで掬いながら、僕たちを横目を見た。

「どんなことを話してるんですか。会長と」榎野花枝が訊いた。

「今日は、満州時代の話。でもまだ取材、始まったばかりですから」

「呆け老人だから、話半分に聞いておいた方がいいわよ。だって今日の会長の話聞いていると、まるで戦前の大物たちと、随分親しかったみたいな言い草じゃない」

（なんだよ、さっき自分で、会長は岸さんとは直接お話しになったんですねなんて、間の手入れてたくせに）

二重人格の秘書がハンバーグにナイフをゆっくりと食い込ませると、柔らかく厚みのある部分から、肉の汁が滲み出した。

「まだそれほど呆けているようには、見えなかったけど」

「けっこうひどいのよ。あたしの名前を忘れるのはまだマシな方。さっき渡してやって自分で机にしまったハンコを、おいハンコはどうした、お前隠したのか、とか言い出すのよ。老人性の疑心暗鬼ね。会社を専務と副社長が乗っ取ろうとしてるとか、小夜子がわしの夕食に毒を盛っているとか、平気で言うんだから。そうかと思うとわたしに突然、律子と小夜子と、どっちがわしを大切にしていると思うかなんて、深刻な顔して訊くのよ。ぜったい変！ もうアルツハイマー一歩手前ね」

「小夜子さんというと？」

「社長の奥さん。長男の聡太郎夫人。京都の人で、色白の美人よ」

「でも二人とも気をつけてね。この会社、ど、どこで見張られているかわかんないから」

榎野さんが目を伏せながら、もじもじとフォークを動かした。わずかにどもる癖がある。

「監視カメラのことですか」

「外部の人と話していると、あとで部長にそれとなく聞かれたりとか」

「細かいな。そこまでやりますか、普通」

「それがこの会社の体質なのよ。ああ、やだやだ。まるで共産圏よ、これじゃあ」

「あの人」と榎野さんが声を低めた。「風紀課よ。きっとそうだよ。眼つきで分かるわ」

ひとつ向こうの席に、ずんぐりした猪のような男が、黙々とカレーを食べている。ときどき鋭い視線を周囲に放っていた。

「フーキ課？」

「本当は総務部の一部なんだけど。その中の数人が密かにそう呼ばれているの。誰がそうなのか、正式には分からないの。社員の思想チェック係。トッコーとか、ケンペイとも呼ばれてるけど」

「何のためにそこまで」

「丹下喜作と丹下ファミリーの疑心暗鬼よ。だって連中は本気で『いつ社内に革命が起こるか分からない』だの、『下克上の芽を潰せ』だの、わけの分からないこと言ってるのよ。『xx課の誰それは、主謀者性があると思うか』なんて秘密のアンケートが廻ってきたりね。もう、馬鹿じゃないかしら。こうしている間も、監視カメラに収められて、総務部の奥にある監視室で唇の動きをチェックされているわ。それでわたしたちいつも、無意味な唇の動きを続けていの。わたし、羽木さんのことをわざとそちら側に座らせたでしょ。カメラに対して、背中向くように。でもテクニックさえ覚えとけば、どうってことないわ」

僕は目を白黒させながら、すぐ後ろの監視カメラを見上げた。榎野花枝につつかれた。

「あの鉄製の丹下神社を見てください。狂気じみているわ。もちろん、社屋内に神社を設けている企業なんて、日本では珍しくはないでしょうよ。でもね」

「確かに凝り過ぎてますね。それに自分の故郷の再現だなんて」

芳田慶子はじっと、僕を見た。

「御神体って、何だと思う？」いたずらっぽい顔だったが、目が異様に光っている。

「飛騨高山から運び込んだ岩じゃないんですか」

そして僕の眼を見ずに、小さな声で「手が、埋まっているのよ。片腕が」とつけ加えた。

「慶子……」榎野さんが低い声で注意した。

「会長の、古い腕のミイラが、そのまま埋められているという噂を聞いたことがあるの」

「まさか」

「切断された自分の腕を、干からびた臍の緒みたいに、後生大事に持っていたのよ。満州時代、変な行者にとっ捕まってね、自分の肉体の一部を御神体にして毎日拝むと、運氣が増大するというインチキ話を、白元さんあたりに吹き込まれたらしいの」

「また何と非科学的な」

食べたばかりのハンバーグを、皿の上に吐き出しそうになった。

「あの会長に科学なんて発想、あるわけじゃない。ここはほとんど、呪術的な企業よ。もしそんな言葉があればの話だけど。壁のいたるところ、丹下喜作の思念が込められているのよ。だからあんまりこの会社に居過ぎると、考え方まで歪んでくるの。」

昔、この会社にも鷺巣数光という、建築界の賞を幾つも獲っていた天才的な設計者がいたわ。彼はこのビルの設計者でもあるから、その辺の本当の事情を全部知っているはずなの。ことによるとあの御神体には、本当に社員の意識を歪ませる力でも籠もってるんじゃないかとすら思うもの。組織に対して、マゾヒスティックにさせる力ね。ここでは個というものが、認められないのね。鷺巣さんも結局、会長と丹下ファミリーに潰されたのね。賞を獲るたび『調子に乗ってるんじゃないのか』『何様のつもりだ』じゃ、話にならないでしょ。朝礼のとき名指しで律子専務に批判されたり。ノイローゼになって設計ができなくなり、ついに事件まで起こしてしまったわ。今じゃどこか田舎で、ほそぼそと暮らしているという話。彼じゃなくても、長年いるとみんなおかしくなるわ」

僕は鷺巣氏の事にはまだ触れないことにした。

「でも、仮にも世間で丹下建設といたら、それなりに」

「しーッ、声が大き過ぎるわ。どこで恐怖のフーキ課が、見張っているかわかりゃしない」

「あの。わたし、用事を思い出したので、これで」

榎野花枝が落ち着きのない顔で言って、おどおどと立ち上がった。

「じゃあまたね。夜、連絡するわ」と言ってプレートを抱え、髪を整えながら足早に去っていった。

芳田慶子は脚を組み替えると、頬杖をつき下唇を突き出した。

「花枝って、変わり者でしょう」

「神経質な方ですね」

「どうせこの会社に不満なんだから、とっとと辞めちゃえばいいのにとと思うんだけど、ダメなんだよなア」

「なぜですか」

「あの子、クリスチャンなの」

「はあ。そのことがどうして」

「この会社に勤め続けることを、自分に与えられた試練として受け取っているのよ。受難なわけ、花枝にとっては。勤務中にもときどき、こっそり聖書を開いているわ。そしていつも手帳に『逃げちゃだめ』、『打ち砕かれて』とか、『愛と謙虚さ』『花枝、ファイト!』とか、メモ書きしているの。いじらしいでしょ」

「関係ないじゃないの、そんなの」

「ところが、この会社に居続けると、そういう論理も体質的に分かるような気になってくるの。組織におけるマゾヒズムね。軽蔑すべき環境からでも、学べるものがあるというのが、花枝の考えなのよ」

芳田さんはフォークをちょっとあげて、

「あそこにいる男、陳だわ」

と僕に目配せした。顎で向こうの方を示して、意味ありげに鼻に皺をよせた。

「会長につきまわっている得体の知れない台湾人。おやおや、珍しく社員食堂なんかでラーメンなんか食べてるじゃないの。あのグルメ親爺が」

後ろをさりげなく振り向いて見ると、禿げ頭に八の字髭の色艶の良い人物が、ゆっくりと箸を動かしていた。麺を箸でつまんで目の高さまで持っていくと、汚い虫か何かをつまんだかのような顔で、じっくりと観察すし、いかにも厭そうに飲み込んでいる。

黒いスーツに赤いシャツ、それに黄色いネクタイというまるで毒蛇のような服装をしている。

「あいつ陳一徳といって、戦後のどさくさのときに、ほんの子供の戦災孤児で、闇市を走り回ってスリやをやっていたとき、大陸から戻って来た白元老師に拾われて、弟子になったというわ。だかららもう、かなりの年なのよ。でもあんな若く見えて、脂ぎっているの、異様でしょう。横浜の貿易商ということになっているけど、あやしげな輸入雑貨を扱っているの。特に健康関係。中国の回春剤とか。この数年、健康に不安のあるウチの会長に小判鮫みたいにべったりとへばりついて、うさん臭い気功法や鍼なんか吹き込んでるのよ。あいつ、社員旅行のときはなぜか必ずついてくるのよ。そして社員の女の子を水着姿の実験台にして、実演してみせるの。みんな嫌がっているわ。でもそれをやると、幹部連中には『素直で協調性がある』ということになって、覚えめでたいわけ。阿呆な新入りの女の子が、乗せられてどんどんやるわ」

「ニセ医者なんですか？」

「一応は、鍼と整体の資格は持ってるらしいけど。会長なんて、かかりつけの医者の方より、陳の方を信頼してるぐらい。始皇帝じゃあるまいし、不老不死っていったってそうはいかないと思うけど。いい儲けね、陳にとっては。よく会長室のテーブルに、金色や紅色の動物の絵の描いてあるオドロオドロしい漢方薬を並べて喜んでいるわ。あいつ、インチキ漢方薬で、永田町のセンセイや霞ヶ関のお役人にも食い込んでいるらしいわ。ウチの喜作会長と、衆議院議員の

船戸川さん、顧問の谷田部さん、それにボディガード役の大角親分とか引率して、よく香港や台湾に行ってるけど、まあ、何をやってるんだかー。あの連中、あたしにいわせりゃ、アジアの恥よ。ところで、まだ陳の奴、こっち見てる？」

「そろそろ出て行くみたいですね」

「じゃあ、気がついてなわね。あいつ、嫌らしいのよとっても」

「芳田さんにも、何か言ってくるの？」

「ええ、ちょっとね」少し怒ったように答えた。

「セクハラセクハラ。とんでもない奴。それにつけても秘書って、因果な商売ね。あと半年以内に辞める覚悟だから、何でもバラしてやるわ」

僕は芳田慶子の憤りと二重人格ぶりに、少なからずとまどっていた。

しばらくして陳一徳はおもむろに箸を置くと、軽蔑した顔で立ち上がり、ハンケチを小さく畳んで内ポケットにしまい込んだ。腹をつき出し、つかつかと階段の方へと去った。

「でもこの企業、分からないことがまだいっぱいあるな。例えば、仮眠室の豪華ベッドの赤ん坊というのは」

やはりいつのまにか、辛島さんの言う『胃カメラ』を演じさせられているようだ。

「あれは喜作のひ孫よ。四代目ね。晴臣っていうの。多分あのおチビちゃんが、将来は丹下建設を率いていくんじゃないの。ちゃちなラストエンペラー。もっともウチの会社が潰れなければの話だけど。あの赤ん坊、ジャガーを乗り回している義彦の息子よ」

「義彦って、あの若い人ですか。ちょっとおしゃれな」

「そう。もっともわたしは全然タイプじゃないけど。六本木の遊び人ね。しょっちゅう高級車買い替えるのが、趣味なの。奥さんは元タレント志望で、少女雑誌の表紙モデルによく載っていた子よ。義彦がクラブでひっかけたみたい。噂けどあの夫婦、薬やマリファナもやってるらしいわ。マンションの秘密パーティーに招かれた社員がいるの。（不意に彼女は左右を伺い）それにしてもわたしたち、危ない会話してるわね。ときどき唇、無意味に動かしてね」

「あの王様が寝るようなベッドと、白い大きな犬には、びっくりしたな」

「お犬様のフェルディナンドね」

「危うく襲われそうになっちゃった」

「気をつけた方がいいわよ。あの犬、社員より自分の方が偉いと思ってんだから。そういうふう育てられたの。あの犬に愛想を振り撒かないと、査定に響くんだもの。営業の子なんか、お犬様を粗末に扱おうと『犬一匹の気持ちが掴めないで、施主の気持ちが掴めるか！』なんてどやされるのよ。お犬様が誰かに唸ると『さすがにフェルディナンド様は、社員の表裏を見抜いている。動物は純粹だから、お前に後ろ暗いことがあると、直感的に分かるんだ』なんてね。犬より、わたしたちの方が地位が下なのよ」

「利潤追求というより、人間蔑視のための心理実験をやっているような会社だなァ」

一瞬、間があった。彼女は大きく息を飲んだ。

「その通り。昔、設計部の定年間近のおじさんが、フェルディナンドに噛みつかれたんだけど、泣き寝入りよ。同僚たちが抗議するようにけしかけたんだけど『わたしが今更どうこういう問題

でもないし』とか、『いつかあの人たちも、きっとわかって頂け日が来ると思うんです』とか呟くだけで、ハッキリと自己主張しないの。設計の腕はいいんだけど、昔気質の職人なのね。もっともCAD導入で、居場所がなくなったって話もあるけど。要するに、ハナから自己の権利を守ろうという気概がないの。だからここでは、理不尽が理不尽のまま、罷り通り続けるのよ」

「だったら、さっさと辞めればいいじゃない」

僕もさすがに義憤を感じて、語気を強めた。

「それができりゃ問題ないわ。でもここに何年もいると、逆に外の世界が恐ろしくなるのよ。ほら、囚人の心理で、牢獄に永い間いると、刑期終了が近づくと憂鬱になり、娑婆に出るのが不安になる例があるらしいじゃない。はたして自分が世間で通用するのかとか、こんなに歪んだ価値観を植え付けられたら、まともな企業じゃ働けないんじゃないかって、疑念に苛まれるのよ。那須の研修センターでは、意図的にそういう社員教育をしているしね。『私がこうして日々仕事ができるのは、会長、社長、専務のおかげです』って、毎朝唱えさせられるのよ。『一社一丸、報恩道』ってね。誰に報恩するのかしら」

「馬鹿ばかしい。洗脳じゃないの。でも、ここで適応できれば、どこでも適応できるさ」

「適応か。……進路指導。適性テスト。チームワーク。協調性。悲しいわね、日本人て。いつも何かに属していなけりゃ、不安になるんだわ。あたしたち、まるで鶏のように管理されるために、生まれてきたようなものね」

「そう考えること自体が、罠に嵌まっていることだよ」

「罠？ 罠といえば罠ね。でもそれなら、罠を超えた意味はどこにあるのよ。その、つまり、もっと大きな究極の意味よ」

不意に辺りの空気が一変した。

一時近くになった社員食堂の私語が静まり、食事をしていた社員連中が、あちこちで目配せをし合った。監視カメラがさまざまな角度から、社員の生態を見下ろしている。

僕は蔦の葉で蔽われたバルコニーの所に、特徴ある黒影が立っていることに気がついた。付近の社員たちはやや距離を置いて、その長身の女を振り返っていた。

(TCIA長官だ……)

「ごめん、あたし食器戻してくるわ。ゆっくりしてって。奥にコーヒーもあるから。じゃあ、またね」

彼女はプレートの上の食器類をまとめて、立ち上がった。

階段の上の丹下律子は、両手をポケットに突っ込みながら、食堂全体を蒼醒めた顔で睥睨している。

あたかも民衆の生活状況を、女王自ら視察に来ているといった雰囲気であった。この前と同様に、褐色の毛皮のコートを着ている。

隣には、陰気な眼つきの背の低い初老の男が、従者のように控えていた。初めて会社を訪れた時、会議室にもいた人物だ。

冷厳な表情をした律子は、横を向いて男に何か指示すると、大股で去って行いった。

(続く)

7章

<http://p.booklog.jp/book/97885/read>